

# 第 I 章 研究の概要

## 1 研究主題及び副主題

### 求められる資質・能力を育む学習指導の在り方 ～指導と評価の一体化を目指す学習評価～

#### (1) 主題設定の理由

人工知能 (AI)、ビッグデータ、Internet of Things (IoT)、ロボティクス等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられた Society5.0 時代が到来しつつある。社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となっており、そうした変化が、どのような職業や人生を選択するかに関わらず、全ての児童生徒の生き方に影響するものとなりつつある。社会の変化にいかに対応していくかという観点に立つと、今後の社会を生き抜くことが難しい時代になると考えられる。

また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、学校においても長期にわたり甚大な影響を及ぼしている。社会全体のデジタル化が推進される中、学校においても、ICT 環境を最大限に活用して学びの保障を進めること、また学校教育の本質的な意義を踏まえ、この事態に対応するためのカリキュラム・マネジメントを展開することが全国の学校に求められた。

このような状況を踏まえ、学習指導要領の着実な実施、指導と評価の一体化を通して目指す児童生徒の資質・能力について、次のように捉えた。

一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすること

学習指導要領では、①「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）、②「何を学ぶか」（教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）、③「どのように学ぶか」（各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実）、④「児童生徒一人一人の発達をどのように支援するか」（児童生徒の発達を踏まえた指導）、⑤「何が身に付いたか」（学習評価の充実）、⑥「実施するために何が必要か」（学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策）の6点を基に、学校教育の改善・充実を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことが求められた。

これらを踏まえ、上川教育研修センターの第18次研究では、「主体的・対話的で深い学びを実現する学習指導の在り方～求められる資質と能力を育む指導と評価～」と主題を設定し、指導と評価の一体化を図る評価方法の工夫と改善を通して、児童生徒一人一人が主体的・対話的で深い学びを実現することを目指してきた。2年次では、特に「主体的に学習に取り組む態度」に焦点化し、その評価について研究・実践を行った。その成果と課題を明確にし、「指導と評価の一体化」を図る学習評価について、評価する時期や場面の精選、さらには評価方法を工夫し、教師の授業改善、児童生徒の学習改善を実現することを目指し、次のように研究を進めることとした。

## (2) 研究主題のおさえ

### ① 研究主題～「求められる資質・能力を育む学習指導の在り方」

「求められる資質・能力」とは、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となるために必要な資質・能力である。

これらを育成する上で必要な教育の在り方を具体化するのが、各学校において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である。

「学習指導の在り方」においては、「主体的・対話的で深い学び」や「カリキュラム・マネジメント」の視点からの授業改善がその中核的な役割を担い、指導と評価の一体化を図ることが重要となる。

また、令和元年度からの GIGA スクール構想により、新たな学校の「スタンダード」として、小学校段階から学校における高速大容量のネットワーク環境の整備が推進された。これを受けて、ICT をツールとして効果的に活用し、教育の質の向上につなげ、教師・児童生徒の力を最大限に引き出すことが求められる。

### ② 副主題～指導と評価の一体化を目指す学習評価

「学習指導」と「学習評価」は学校の教育活動の根幹であり、教育課程に基づいて組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントの中核的な役割を担っている。評価の結果によって後の指導を改善し、新しい指導の成果を再度評価するという指導と評価の一体化を図る中で、児童生徒一人一人のつまずきや伸びについて指導過程で評価する形成的な評価を行うことが重要である。形成的な評価を生かしながら、学習指導要領に示す各教科の目標に照らして児童生徒が「おおむね満足できる」状況となるようきめ細かく指導・支援することが求められる。さらに、「指導と評価の一体化」の観点から、児童生徒が自ら学習の進め方を改善していくことができるように指導・支援していくことが重要である。

## 2 求める児童生徒像

「知識・技能」を習得し、「思考力・判断力・表現力等」を高め、「学びに向かう力・人間性等」を涵養し、各教科等の「見方・考え方」を自在に働かせながら深い学びに向かっていく児童生徒

## 3 研究の仮説

身に付けさせるべき児童生徒の資質・能力が明確化された目標を基にした学習指導と、形成的な評価に重点を置いた適切な評価の「指導と評価の一体化」を図ることで、児童生徒の学習や教師による指導の改善等につなげ、組織的かつ計画的に教育活動の質が向上し、児童生徒の求められる資質・能力が育成されるであろう。

## 4 研究内容

### 指導と評価の一体化

#### (1) 目標と評価の一体化

- ・ 単元目標の明確化
- ・ 目標と評価の位置付け

#### (2) 指導計画・評価計画

- ・ 単元構成の工夫
- ・ 一単位時間の学習過程
- ・ 段階的な振り返りの設定
- ・ パフォーマンス課題及び評価
- ・ 形成的な評価（指導に生かす評価）
- ・ 総括的な評価（記録に残す評価）
- ・ 主体的に学習に取り組む態度と知識・技能，思考・判断・表現の関係性

#### (3) 個別最適な学び，協働的な学び

- ・ 個別最適な学びと個に応じた指導
- ・ 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実
- ・ 指導と評価の一体化の考え方に立った学習評価の改善
- ・ 主体的に学習に取り組む態度についての評価との関連

## 5 研究の進め方

- ◇ 教科を主体として研究を進める。
- ◇ 文献や実践資料に基づく理論研究を週 1 回の定例研究室会議及び夏季，冬季の集中研究室会議において進める。
- ◇ 各年次とも，上川教育研修センターの研究員及び，研究協力校の授業実践を基にして理論を検証し，研究紀要にまとめる。
- ◇ 研究の成果については，授業研究，研究協議等の授業実践で明らかにされた成果と課題を基に，研究紀要にまとめる。

## 6 研究計画の概要

令和 4 年度から令和 5 年度にわたる 2 か年において，指導計画及び評価計画の具体，個別最適な学びと協働的な学びの実践を研究内容の柱として研究を推進する。

### 1 年次 令和 4 年度 授業実践（所員 2 名，研究協力校 2 校）

#### ○研究員の授業実践

旭川市立中央中学校 理科（第 1 学年「身のまわりの物質」）  
 研究員 三上 貴也  
 旭川市立北光小学校 算数科（第 3 学年「2 けたの数のかけ算」）  
 研究員 近田 泰斗

#### ○協力校の授業実践

旭川市立高台小学校 国語科（第 5 学年「たずねびと」）  
 教諭 六本木典子・藤矢 颯太  
 旭川市立広陵中学校 理科（第 1 学年「身のまわりの現象」）  
 教諭 佐藤 太一・宍戸 広太

7 研究の全体構造

研 究 主 題

求められる資質・能力を育む学習指導の在り方

～指導と評価の一体化を目指す学習評価～

求める児童生徒像

「知識・技能」を習得し、「思考力・判断力・表現力等」を高め、「学びに向かう力・人間性等」を涵養し、各教科等の「見方・考え方」を自在に働かせながら深い学びに向かっていく児童生徒

研 究 の 仮 説

身に付けさせるべき児童生徒の資質・能力が明確化された目標を基にした学習指導と、形成的な評価に重点を置いた適切な評価の「指導と評価の一体化」を図ることで、児童生徒の学習や教師による指導の改善等につなげ、組織的かつ計画的に教育活動の質が向上し、児童生徒の求められる資質・能力が育成されるであろう。

研 究 内 容

指導と評価の一体化

(1) 目標と評価の一体化

- ・ 単元目標の明確化
- ・ 目標と評価の位置付け

(2) 指導計画・評価計画

- ・ 単元構成の工夫
- ・ 形成的な評価（指導に生かす評価）
- ・ 一単位時間の学習過程
- ・ 総括的な評価（記録に残す評価）
- ・ 段階的な振り返りの設定
- ・ 主体的に学習に取り組む態度と知識・技能、思考・判断・表現の関係性
- ・ パフォーマンス課題及び評価

(3) 個別最適な学び、協働的な学び

- ・ 個別最適な学びと個に応じた指導
- ・ 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実
- ・ 指導と評価の一体化の考え方に立った学習評価の改善
- ・ 主体的に学習に取り組む態度についての評価との関連

新たな学校のスタンダード

ICT の活用

- ・ 多様で大量の情報の収集、整理・分析、まとめ、表現
- ・ 児童生徒の思考の過程や結果の可視化
- ・ 情報の双方向性による瞬時の情報共有等

## 第Ⅱ章 研究内容

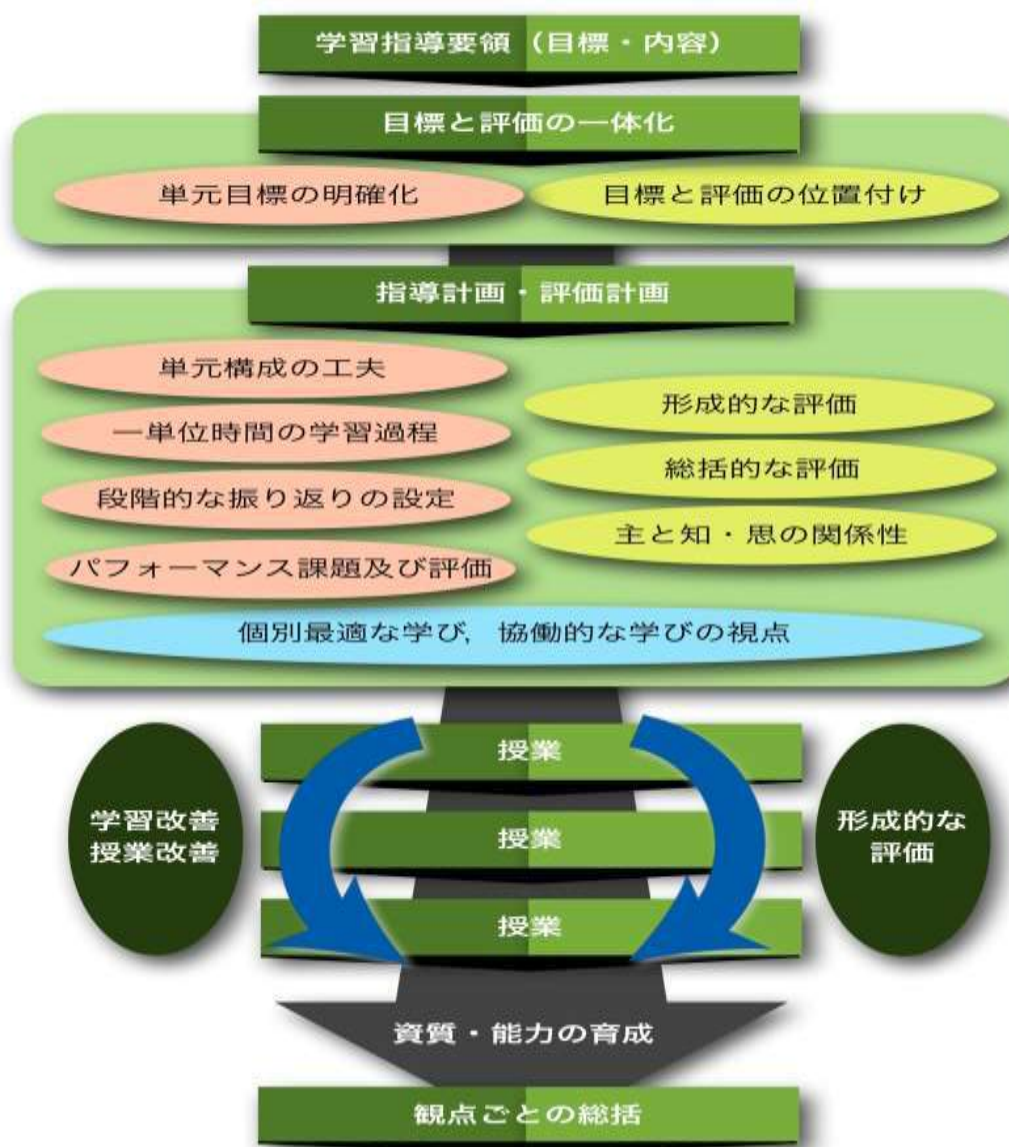
### 1 第19次研究のねらい

本研究は、児童生徒一人一人が、各教科等において生きて働く「知識及び技能」を習得し、未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」を高めながら、「学びに向かう力、人間性等」、つまり各教科等の指導を通して育成する資質・能力を身に付け、各教科等の「見方・考え方」を自在に働かせながら深い学びに向かうための「指導と評価の一体化」を図る学習評価について、評価する時期や場面の精選、更には評価方法を工夫することで、教師の授業改善、児童生徒の学習改善の実現を目指している。

そのため、当センターでは、「求められる資質・能力を育む学習指導の在り方」を研究主題に掲げ、第19次研究では、指導と評価の一体化を目指す学習評価として研究内容を次の3つに分け研究を進める。

- (1) 指導と評価の一体化に向け、教科等の指導を通して育成する資質・能力を明確にした目標と評価内容等を合致させること。
- (2) 指導と評価の一体化に向け、パフォーマンス課題等の単元構成の工夫を行った指導計画と、形成的な評価に重点を置き、児童生徒の学習や教師による指導の改善等につながる評価計画を作成すること。
- (3) 多様な子どもたちを育成する個別最適な学びと、子どもたちの多様な個性を生かす協働的な学びの一体的な充実を図ること。

### 指導と評価の一体化のモデル



2 研究の具体

研究内容

指導と評価の一体化

学校現場では、「指導と評価の一体化」について、実際の取組を通じた検証が続いている。それは、現行の学習指導要領において、評価の重要性について明確に位置付けられたことも大きく関係している。

指導と評価の一体化を目指すためには、指導や評価の目的に立ち戻る必要がある。それは、児童生徒の資質・能力の育成に他ならない。そのため、授業を構築する上でまず行うべきことの一つに、単元や内容のまとまりの目標を設定することが挙げられる。「指導と評価の一体化」を目指す上で、目標と評価の一体化を図る必要がある。

(1) 目標と評価の一体化

単元や内容のまとまりで育成する資質・能力

これまで、学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」を改めて捉え直し、汎用的な能力の育成を重視する世界的な潮流を踏まえつつ、知識及び技能と思考力、判断力、表現力等をバランスよく育成してきた我が国の学校教育の蓄積を生かしていくことが、令和の時代の学校教育に求められる。

「生きる力」をより具現化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力は、以下の三つの柱に整理することができる。

【教育課程全体で育成を目指す資質・能力】

- 生きて働く「知識及び技能」の習得  
何を理解しているか、何ができるか。
- 未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」の育成  
理解していること・できることをどう使うか。
- 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養  
どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか。

知・徳・体にわたる「生きる力」を児童生徒に育むために「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していくことができるようにするため、全ての教科等の目標は「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に再整理された。

「指導と評価の一体化」を実現させ、児童生徒が各教科等の「見方・考え方」を自在に働かせながら、深い学びに向かわせるためには、単元や内容のまとまりの目標を明確にする必要がある。

三つの柱に再整理された資質・能力と目標の関連性を理解した上で位置付けることで、「何ができるようになるか」を明確にすることができる。

資質・能力とは、「生きる力」や各教科等の学習を通して育まれる資質・能力、学習の基盤となる資質・能力、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力といった、あらゆる資質・能力に共通する要素を資質・能力の三つの柱として整理したものである。また、これまで積み重ねられてきた一人一人の児童に必要な力を育む学校教育の実践において、各教科等の指導を通して育成してきた資質・能力を再整理し、教育課程の全体として明らかにしたものである。

そのことにより、経験年数の短い教師であっても、各教科等の指導を通して育成を目指す資質・能力を確実に捉えられるようにするとともに、教科等横断的な視点で教育課程を編成・実施できるようにすること、さらには、学校教育を通し

資質・能力と目標

てどのような力を育むのかということ和社会と共有することを目指すものである。

なお、これらの三つの柱は、学習の過程を通して相互に関係し合いながら育成されるものであることに留意が必要である。

単元や内容のまとまりの目標とは、「生きる力」を児童生徒の育成するために再整理された、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱の資質・能力を基に、指導のねらいを明確にするものである。

### 目標と評価の 一体化

これまでの評価の課題の一つに、「評価疲れ」が挙げられる。これまでの観点別評価では、毎時間の授業観察で「思考・判断・表現」や「関心・意欲・態度」の表れを見取り、さらには記録する評価として捉えがちで、授業において教師が評価のためのデータ取りや学習状況の点検に追われる事態が生じていた。評価に追われるのではなく、目的意識を明確にして指導したこと（「何ができるようになるか」を明確にした指導）を中心に評価をしていくことが必要である。

また、評価の信頼性・妥当性を高め、「何のための評価なのか」を明らかにしていかなければならない。

「目標と評価の一体化」とは、「指導と評価の一体化」を目指すときに考えられる、「どのような資質・能力を育成し、それを児童生徒のどのような姿で評価するのか」という視点のことである。

目標と評価の一体化とは、「指導と評価の一体化」を実現させるために、単元や内容のまとまりで育成する資質・能力を明確にして目標を設定し、その目標を適切に評価できる計画を立てることである。

### 単元目標の 明確化

目標と評価の一体化を図る上で、単元目標を明確にする必要がある。単元目標は、その単元や内容のまとまりで育成する資質・能力を明確にした上で設定する。単元目標を設定する場合、次のことに留意する。

#### 【単元目標の設定での留意点】

- ① 教科等で育成する資質・能力の確認
  - ・学習指導要領を基に、教科等で育成する資質・能力を確認する。
- ② 単元で取り上げる内容の確認
  - ・年間指導計画等を基に、単元で取り上げる内容を確認する。
- ③ 児童生徒の実態、学習経験等を基盤とした単元目標の設定
  - ・資質・能力や指導事項を基に、児童生徒の実態や学習経験等を考慮した単元目標を最終的に決定する。

単元の目標を設定する際には、まず、学習指導要領を基に、教科等で育成する資質・能力を確認する。教科によっては、学年ごとに設定されていたり、内容のまとまり等で位置付けられていたりすることもあるので、注意が必要である。

次に、学習指導要領の内容や学習指導要領解説の記述内容、年間指導計画等を基に、単元で取り上げる内容を確認する。1年間を通して、当該学年に示された内容を身に付けることができるよう指導する。

最後に、児童生徒の実態や学習経験、前単元までの学習状況等を踏まえ、②で確認した内容を基に、単元の目標を設定する。

上記の留意点は、作成の手順を示したものであり、いずれかを満たせばよいという趣旨のものではないことに注意する必要がある。

単元目標の明確化とは、「指導と評価の一体化」を図るため、教科や内容のまとまり等で育成する資質・能力や単元で取り上げる内容を明確にし、単元目標を設定することである。

学習評価

学習評価は、学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するものである。各教科等の評価については、学習状況を分析的に捉える「観点別学習状況の評価」と「評定」が学習指導要領に定める目標に準拠した評価として実施するものとされている。

観点別学習状況の評価とは、学校における児童生徒の学習状況を、複数の観点から、それぞれの観点ごとに分析する評価のことである。児童生徒が各教科等での学習において、どの観点で望ましい学習状況が認められ、どの観点到課題が認められるかを明らかにすることにより、具体的な学習や指導の改善に生かすことを可能とするものである。

各学校において目標に準拠した観点別学習状況の評価を行うに当たっては、観点ごとに評価規準を定める必要がある。評価規準とは、観点別学習状況の評価を的確に行うため、学習指導要領に示す目標の実現の状況を判断するよりどころとして設定したものである。

目標と評価の位置付け

単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うと同時に、評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価することを示し、授業と評価の改善を両輪として行っていくことが必要である。

【学習評価の意義】

■カリキュラム・マネジメントの一環として

・「学習指導」と「学習評価」は、教育課程に基づいて組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図る「カリキュラム・マネジメント」の中核的な役割を担っている。

■主体的・対話的で深い学びの視点から

・教師が自らの指導のねらいに応じて授業での児童生徒の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かしていくことが大切である。  
 ・「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を通して各教科等における資質・能力を確実に育成する上で、学習評価は重要な役割を担う。

学習評価の基本的な方向性

学習評価を真に意味のあるものとし、指導と評価の一体化を実現するために、学習評価について、基本的な方向性を確認する。

(1) 児童生徒の学習改善につながるか

学習評価は、児童生徒のために行われなければならない。いわゆる「評定のための評価」になってしまうと、先述の「評価材料集めばかりを行うことでの評価疲れ」を引き起こしてしまう。資質・能力の育成のため、児童生徒が自らの学習を調整する等、学習改善につながるものにしていく必要がある。

(2) 教師の指導改善につながるか

形成的な評価を教師が行うことで、児童生徒の学習状況や達成状況、それに伴う指導改善の見通しをもつことができる。形成的な評価はどんな学習においても行われるという性質から、教師の指導改善につながるものでなければならない。

(3) 必要性・妥当性が認められるか

学習評価は目的ではなく、児童生徒の資質・能力を育成するための手段である。前例や慣例の通りに行うのではなく、必要性（その評価は必要か）や妥当性（その評価は適切か）を問い、常に見直しを行うことで学習評価の充実が図られる。



学習評価の観点

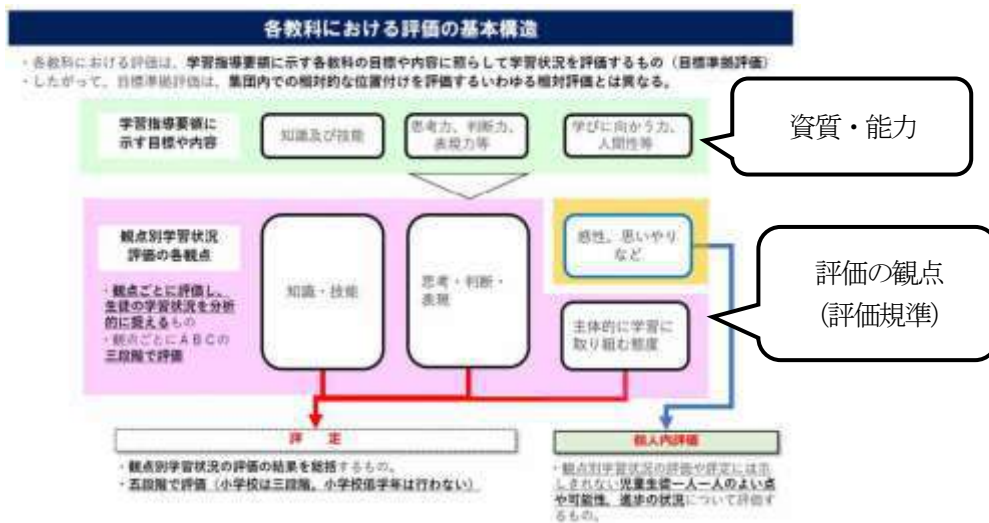
なお、観点別学習状況の評価については、資質・能力の三つの柱に再整理されたことを受け、次の3観点に整理された。

資質・能力と観点別学習状況の評価（評価規準）については、文言の違いはもちろんのこと、その位置付けも異なるので、学習指導案等に記載する場合は注意が必要である。

目標と評価を明確にし、指導計画に位置付けることにより、指導と評価の一体化の、より一層の充実が図られる。

【各教科における評価の基本構造】

～「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」より



(2) 指導計画・評価計画

評価規準の設定

指導と評価の一体化に向け、単元の目標を設定し、指導計画を立案する上でまず行うのは、単元や内容のまとまり等の評価規準の設定である。

評価の観点が各教科等の目標を踏まえて作成されていること、または学年（または分野）の目標を踏まえて作成されていることを確認することが必要である。

児童生徒に求められる資質・能力を育成することを目指した授業改善の取組は、後述の形成的な評価を基に行われ、これまでも多くの実践が重ねられてきた。授業改善の取組を活性化していく視点として、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」は、共通的・普遍的な要素である。つまり、主体的・対話的で深い学びの視点をもった授業改善を常に行い、児童生徒の資質・能力の育成を図るのである。

主体的・対話的で深い学びの実現を目指して授業改善を進めるに当たり、特に、「深い学び」の視点に関して、各教科等の学びの深まりの鍵となるのが、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」である。

各教科等の「見方・考え方」を自在に働かせながら深い学びに向かっていく児童生徒を育成するためには、児童生徒が自ら思考して問い続ける学習過程を目指し、単元や題材などを見通しながら単元を構成する必要がある。

単元構成には、一つの単元で資質・能力の育成を目指すものもあれば、複数の単元や教材、学習内容等を複合化して構成し、資質・能力の向上を図るものもある。

そこで、単元構成の工夫について、次のように例示する。

単元構成の工夫

**【単元構成の工夫の例】**

■単元そのもので構成する

・学習内容，指導事項，内容のまとまり等で一つの単元を構成する。

■内容のまとまり等で単元を複合化して構成する

・内容のまとまり等を考慮し，複数の単元を複合化して単元を構成する。

・形成的な評価及び総括的な評価については，評価の信頼性や妥当性を考慮し，適切に設定することが必要である。

■学習活動のつながりを考慮して単元を構成する

・学習活動の関連を考慮し，複数の単元を複合化して単元を構成する。

・各校のカリキュラム・マネジメントを基に構成する。

■各教科等を横断的に俯瞰し，単元を構成する

・「各教科等と総合的な学習の時間」といった，教科同士の関連を考慮して，横断的に単元を構成する。

・各校のカリキュラム・マネジメントを基に構成する。

単元構成の工夫とは，児童生徒の資質・能力の育成を目指すために，主体的・対話的で深い学びの視点を取り入れた指導計画を作成することである。

一単位時間の学習過程

児童生徒一人一人が，目標を理解し，学習への興味・関心を高め，主体的に課題解決に取り組むようにするためには，単に目標を示すのではなく，児童生徒が単元の学習で何を学ぶのか，どのような解決方法があるのかなどを見通すことができるようにする必要がある。

学習課題の設定に当たっては，課題意識を高める問題を提示した上で，児童生徒の主体的な学びを促すため次の点に配慮することが大切である。

■学習の目標や内容を理解できる学習課題

■学習への興味・関心や問題意識を高める学習課題

■主体的に学ぶ意欲を高める学習課題

■学習の見通しをもつことができる学習課題

また，児童生徒が見通しをもって課題を解決するためには，課題解決の方法や手順の確認が必要であることから，既習事項や生活経験を想起させたり，学習過程を確認させたりする学習活動を取り入れる。

このように，個人思考に入るまでに学習課題を理解させ，課題解決の方法や手順を確認する中で見通しをもたせることにより，児童生徒の主体的な学びが可能となる。

児童生徒が一単位時間の終末において，何をどのように学んで，何ができるようになったのかを実感して次時への学習意欲を高めるためには，振り返りの時間を設定し，「学びの成果」や「解決の過程」を主体的に振り返らせることが必要である。

「学びの成果」の振り返りでは，その時間に学習したことで，何が分かり，何ができるようになったのか等の自らの学習状況を自己評価させる。

「解決の過程」の振り返りでは，問題解決的な学習過程とその方法や手段を通して学びの成果を得るに至った自分自身の学習の足跡を自己評価させる。

振り返りの過程は，次のようなものが考えられる。

**【学習の終末で行う学習過程】**

- ① 学習課題に対するまとめを行う。
- ② 練習問題に取り組む。
- ③ 個人思考の段階における自分の考えを見直し更新する。
- ④ 学びの成果を振り返る。
  - ・本時の学習の理解度を「4件法」等で表す。
  - ・本時の学習で分かったこと、分からなかったことを言語化する。
  - ・本時の学習から新たな疑問を言語化する。
- ⑤ 解決の過程を振り返る。
  - ・本時の学習の解決の過程を振り返る。

このように、一単位時間の終末の場面（教科の特性や単元の内容によってはその限りではない）で単元の目標を見通した「学びの成果」や「解決の過程」を振り返らせることにより、主体的な学びが次時につながるものとなり、学習を調整し、粘り強く取り組むことができる。

単元の学習を通して、児童生徒が「何ができるようになったのか」という学習の成果を的確に捉え、次の学習に向かうことができるようにするために、次の①～③の場面など、振り返りの時間を適切に設定することが効果的である。これにより、児童生徒の学習を調整する機会を保障するとともに、教師は、主体的に学習に取り組む態度の「自己調整」や「粘り強さ」を見取ることができるようにする。

**【単元、内容のまとまりを通した振り返りの過程】**

- ① 学習の開始時点（学習を価値付け、見通しをもつ姿）
  - ・単元や内容のまとまりにおける目標の設定
  - ・目標を達成することの意味やよさなどの価値付け
  - ・目標達成までの見通し
- ② 学習の途中段階（自らの学習状況を把握し、修正する姿）
  - ・目標達成に向けて、自らの学習状況を理解する。
  - ・目標達成に向けて、何が必要かを理解する。
  - ・学習の進め方を修正する。
- ③ 学習の終了時（何ができるようになったのかを実感し、学習意欲を高める姿）
  - ・目標が達成できたかを判断する。
  - ・目標達成までの過程とその成果を実感する。
  - ・他の学習や生活に学習の成果を生かそうと考える。

一単位時間の学習過程では、児童生徒の主体的な学びを促すため学習課題の設定を工夫したり、学びの成果や解決の過程を主体的に振り返らせたりすることが大切である。

**パフォーマンス  
課題及び評価**

「深い学び」の実現に向けた手立ての一つに、教科等の学習指導において、パフォーマンス課題を用いる手立てを講じた指導計画が挙げられる。

パフォーマンス課題とは、複数の知識や技能を総合して使いこなすことを求めるような複雑な課題を指す。具体的には、レポートや小論文、詩や小説、ポスター、図表やグラフ、模型などの完成作品を示す課題や、口頭発表、ロールプレイ、演奏や演技、演劇、実験器具の操作などのその場で発表または実技を行う課題が

パフォーマンス  
課題及び評価と  
授業改善

考えられる。

また、パフォーマンス評価とは、ある特定の場面を設定して、複数の知識や技能などを用いて行われる人の行動や作品を直接的に評価する方法である。具体的には、思考力、判断力、表現力等の見えにくい学力をパフォーマンス課題によってパフォーマンス（行動や作品など）へと可視化し、ルーブリックなどを活用してパフォーマンスを解釈することである。

学習過程の中で、資質・能力がどの程度身に付いているのかをパフォーマンス課題で見取ることで、児童生徒の学習改善及び教師の授業改善につながっていく。児童生徒はパフォーマンス評価を元に自己の学びを振り返り、成果や課題を明らかにして、自己調整をしながら次の学びにつなげる機会とすることができる。教師はパフォーマンス評価の結果を元に自らの実践を振り返り、「課題は何だろう」「課題となる力を育てる指導や言語活動は、適切に設定されていたのか」などと指導の改善につなげることができる。指導と評価の一体化を図る上で、パフォーマンス課題及び評価は有効な手立てとなり得るのである。

パフォーマンス  
課題及び評価の  
設定

パフォーマンス課題及び評価は、様々な教科で実施することが可能である。しかし、パフォーマンス課題及び評価そのものを目的とするのではなく、授業改善を行う上でどのような場面・方法で実施することが適切かを考える必要がある。

パフォーマンス課題を設定する場合は、教科や単元で育成する資質・能力を明確にして、年間指導計画を基に学習内容や単元構成を視野に入れ、パフォーマンス課題及び評価を設定する単元や内容のまとまり等を選定することが大切である。

パフォーマンス課題は単元全体で取り組むものであることから、児童生徒には単元導入時に提示し、パフォーマンス課題の成果物を作成するのは単元の終末となる。ただし、児童生徒が学習調整をしながら他者と協働したり、加除修正等のパフォーマンスの質を向上させたりする活動を組み入れるような指導計画を考慮することが重要である。

パフォーマンス評価を行う際には、評価の妥当性や信頼性を高めるため、ルーブリックという評価指標が必要となる。ルーブリックとは、児童生徒の評価項目ごとのパフォーマンスの質がどの尺度に当たるかを段階的に評価する基準表であり、どのような特徴が見られればどの評価結果になるかを具体的に述べたものである。

ルーブリックを用いて評価を実施することで、児童生徒の思考や理解を適切に評価することができる。つまり、児童生徒は何ができるようになるのか（目指すべきなのか）ということを理解し、教師は児童生徒の目指すべき姿が具体的にになり、指導と評価の一体化を図ることができるようになる。

パフォーマンス課題及び評価を実施する場合は、「活動あって学びなし」という状況に陥らないように「目標と評価の一体化」の視点を持ち、指導計画及び評価計画を構築する必要がある。育成すべき資質・能力を明確にし、児童生徒の実態を考慮し、パフォーマンス課題及び評価を実施する必要性を吟味することが大切である。

パフォーマンス課題及び評価は、指導と評価の一体化の視点で、児童生徒の学習改善、教師の授業改善に向けて有効な手立ての一つである。資質・能力のバランスのとれた学習評価を行うためには、パフォーマンス評価などを取り入れ、多面的・多角的な評価を行うことが必要である。

評価計画の作成

これまで述べたように、指導事項（内容）、児童生徒の実態、実施単元の事前・事後を教師が把握して目標を設定することで、その目標は児童生徒にとって、必要な資質・能力を反映したものに成り得ると考える。そのように設定した目標は、その単元におけるゴールであり、そこに児童生徒が到達できるように学習を計画していく。そこから、「この時点では、これぐらいの力を身に付けておくことが求められる」と逆算的に考えていく。このように、目標の達成に向けて通過しておかなければならないチェックポイントを設定していくことが、評価計画を作成することにつながっていくと考える。

児童生徒一人一人に学習の確実な定着を図るためには、学習指導要領に示された目標に準拠した評価を焦点化して実施することが必要である。

また、学習評価は、日々の授業の中で児童生徒の学習状況を適宜把握して授業改善に生かすことが重要であり、観点別の学習状況については、毎回の授業ではなく単元や題材などの内容や時間のまとまりごとに、それぞれの実現状況を把握できる段階で行うなど、その場を精選することが重要である。

そこで、単元の評価計画においては、それぞれの時間の目標や内容に応じて、観点別評価（「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」）をバランスよく位置付けることが大切である。

さらに、評価を焦点化するためのもう一つの手立てとして、形成的な評価（指導に生かす評価）と総括的な評価（記録に残す評価）のどちらを目的とするのかを明らかにした。

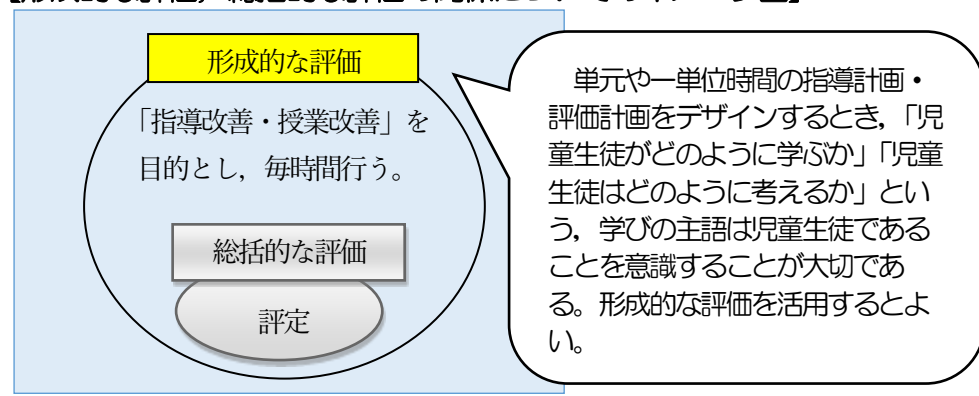
形成的な評価は、観察や発言、ワークシート等への記述内容などを基に、個に応じた指導や授業改善に生かすことを目的として毎時間行うものである。例えば、単元の前半では努力を要する状況の児童生徒を中心に見取り、単元や本時の目標を達成するために必要な手立てや支援を行うことも考えられる。目標の実現のために児童生徒の学習状況を机間指導等で適切に見取って支援し、つまずきの確かな解消を図る。全児童生徒を対象にはいないが、必要に応じて総括の資料に活用することもある。

一方、総括的な評価は、ノートや作品、レポートやパフォーマンス課題など全ての児童生徒の学習の成果、状況が判断できるものを参考にしながら、主として評定の資料とすることを目的として行うものである。そのため、教科ごとに時間や学習活動のまとまりを考え、まとまりの最後の時間に記録に残す評価を行うなど、指導した内容の達成状況が適切に見取れる段階で評価する。なお、総括的な評価においても、評価後は個に応じた指導や授業改善に生かしていく。

形成的な評価  
（指導に生かす  
評価）

総括的な評価  
（記録に残す評  
価）

【形成的な評価、総括的な評価の関係についてのイメージ図】



学習評価の実施に当たっては、評価結果が評価の対象である児童生徒の資質・能力を適切に反映しているものであるという学習評価の妥当性や信頼性が確保

授業改善のための  
形成的な評価

されていることが重要である。また、学習評価は児童生徒の学習状況の把握を通して、指導の改善に生かしていくことが重要であり、学習評価を授業改善や組織運営の改善に向けた学校教育全体の取組に位置付けて組織的かつ計画的に取り組むことが必要である。

形成的な評価、総括的な評価の2つの視点から評価を捉えることで、評価の観点や評価の回数を精選し、効果的・効率的な評価となることを目指していく。

なお、評価の方法については、ノートやワークシート、作品、レポートやパフォーマンス課題など、授業後に教師が確認しながら評価できるものの他、発言や交流の様子など、授業中の学習状況を見取りながら評価するものなど、目的に応じた方法を選択して行うこととした。

形成的な評価、総括的な評価とは、学習評価の妥当性や信頼性を確保するための2つの視点であり、評価計画に明確に区別して位置付けることにより、効果的・効率的な評価となる。特に形成的な評価は授業改善を図る上で重要である。

観点ごとの評価

「知識・技能」の評価は、各教科等における学習の過程を通じた知識及び技能の習得状況について評価を行う。また、それらを既有的知識及び技能と関連付けたり、活用したりする中で、他の学習や生活の場面でも活用できる程度に概念等を理解したり、技能を習得したりしているかについて評価するものである。

「思考・判断・表現」の評価は、各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかを評価するものである。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、単に継続的な行動や積極的な発言を行うなど、性格や行動面の傾向を評価するというのではない。各教科等の趣旨に照らして、知識及び技能を習得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど、自らの学習を調整しながら学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重要であり、以下の2点の側面において評価するものである。

- ① 知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面
- ② ①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面

主体的に学習に  
取り組む態度と  
知識・技能、思  
考・判断・表現  
の関係性

主体的に学習に取り組む態度の評価については、そのものを個別に評価するのではなく、知識・技能や思考・判断・表現の2観点の獲得に向かうプロセスを評価することが重要である。

評価計画の作成に当たっては、各教科の単元や題材の目標を踏まえ、内容に即して「知識・技能」または「思考・判断・表現」と関連付けて評価することが必要である。その際、児童生徒が自らの学習状況を振り返ったり、自らの考えを記述したり、他者との協働を通して自らの考えを深めたりする場面を単元や題材などの内容や時間のまとまりの中で設定して見取れるようにしておくことが大切である。

例えば、思考・判断・表現した作品（学習成果等）を修正できるような指導計画を設定し、それを修正するプロセスで発揮された、粘り強さや自らの学習を調整しようとする姿で評価するといったことである。

本研究では、学習活動における具体的評価規準から目標に達成したと判断する

具体的な姿を想定し，評価の妥当性を高め，適切な評価を行えるようにした。

これらを踏まえた上で，評価の場面と方法を学習指導案に位置付けることが，教科の特性，学習内容等に応じて目標を確実に達成させ，資質・能力を育成することに結び付く。

主体的に学習に取り組む態度と知識・技能，思考・判断・表現の関係性とは，主体的に学習に取り組む態度の評価について，そのものを個別に評価するのではなく，知識・技能や思考・判断・表現の2観点の獲得に向かうプロセスを評価することである。

第1学年理科「身のまわりの物質」 研究員授業 中央中学校  
生徒の興味・関心に基づいた課題設定を目指した授業

研究内容(1) 目標と評価の一体化について

- ・ 単元目標の明確化
- ・ 目標と評価の位置付け

教科の特性等や児童生徒の実態を考慮した単元の目標を明確にし、指導と評価の一体化を図る評価規準を設定した。

単元目標	評価規準
① 身のまわりの物質の性質や変化に着目しながら、状態変化と熱、物質の融点と沸点についての基本的な概念や原理・法則などを理解するとともに、科学的に探究するために必要な観察、実験などに関する基本操作や記録などの基本的な技能を身に付けること。 (知識及び技能)	① 知識・技能 身のまわりの物質の性質や変化に着目しながら、状態変化と熱、物質の融点と沸点についての基本的な概念や原理・法則などを理解するとともに、科学的に探究するために必要な観察、実験などに関する基本操作や記録などの基本的な技能を身に付けている。
② 状態変化について、問題を思いだし見通しをもって観察、実験などを行う。物質の性質や状態変化における規則性を見いだし表現すること。 (思考力、判断力、表現力等)	② 思考・判断・表現 身のまわりの物質の性質や変化に着目しながら、状態変化と熱、物質の融点と沸点についての基本的な概念や原理・法則などを理解するとともに、科学的に探究するために必要な観察、実験などに関する基本操作や記録などの基本的な技能を身に付けている。また、問題を思いだし見通しをもって観察、実験などを行う。物質の性質や状態変化における規則性を見いだし表現している。
③ 状態変化に関する事象・現象に導きだす疑問、科学的に探究する態度を養うこと。 (学びに向かう力、人間性等)	③ 主体的に学習に取り組む態度 身のまわりの物質の性質や変化に着目しながら、状態変化と熱、物質の融点と沸点についての基本的な概念や原理・法則などを理解するとともに、科学的に探究するために必要な観察、実験などに関する基本操作や記録などの基本的な技能を身に付けている。

学習過程において、「①課題を設定する力」と「②考察する力」の2つ力の育成に重点を置いた。

「①課題を設定する力」は、「問題を見いだし見通しをもっている姿で評価を行った。」

「②考察する力」は、「規則性を見いだし表現する」姿で評価を行った。

研究協力校授業 高台小学校 研究内容1【目標と評価の一体化】

単元で育成する資質・能力や指導事項を基に4つの目標を設定した。国語科における言語活動「主人公（綾）が1番影響を受けたものは何かプレゼンしよう」を通し、特に②の資質・能力を育成することに重点を置いた。また、指導と評価の一体化を図るため、目標と合致し、評価をする場面で信頼性・妥当性が保障された評価規準の設定を目指した。

単元で身に付けさせたい資質・能力

① 語彙や言葉の使い方に対する感覚を磨き、語や語句を使うことができる。(知識及び技能)	② 人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる。(思考力、判断力、表現力等)
---	--

「綾が一番影響を受けたものは何かをプレゼンしよう」

③ 文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げることができる。(思考力、判断力、表現力等)	④ 粘り強く物語の全体像を具体的に想像し、学習の見通しをもって、物語に対する思いや考えを広げることができる。(学びに向かう力、人間性等)
--	--

【単元の評価規準】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
登場人物の心情を捉えるときに、語彙や言葉の使い方に対する感覚を磨いている。	心情の変化などを捉えて、人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしている。	粘り強く物語の全体像を具体的に想像し、学習の見通しをもって、物語に対する思いや考えを広げようとしている。

内容や時間のまとまりにおいて目指す児童の姿

研究協力校授業 広陵中学校 研究内容1【目標と評価の一体化】

《単元目標の明確化》

生徒に行った事前アンケートから、「理科が難しい」「自分には出来ない」という「自己効力感」が低い生徒が多くいるということが分かった。同アンケートの「理科の授業の嫌い・苦手なところは何か」という項目の回答では、「考察」や「予想」、「考えを書くこと」といった内容が多く見られ、自己効力感の低さの根底には、生徒の思考力、判断力、表現力等の低さがあると考えた。そのため、本単元では、「資質・能力を育成するために重視すべき学習過程」(学習指導要領)のうち、「検証計画の立案」場面の「仮説を確かめるための観察・実験の計画を立案する力」と、「考察・推論」場面の「観察・実験の結果を分析・解釈する力」の育成に重点を置いた。

《目標と評価の位置付け》

上記単元目標への到達を評価するために、その具体的な姿として、「光について問題を見いだし、見通しをもって観察、実験などを行う」姿(検証計画の立案)と、「光の性質の規則性や関係性を見いだし表現する」姿(考察・推論)を評価規準として設定した。

単元で身に付けさせたい資質・能力	単元を通して、「AMHシート」を活用します。
① 光に関する事象や現象を自ら物言いや話し言葉で表現し、自分の考えを伝えたり、相手の考えを聞き取り、自分の考えを整理すること。また、それらの経験、学習などに必要な技能を身に付けること。(知識及び技能)	② 光について問題を見いだし、見通しをもって観察、実験などを行う。光の性質の規則性や関係性を見いだし表現すること。(思考力、判断力、表現力等)

【単元の評価規準】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
光についての観察、実験を通して、光が水やガラスなどの物質の境界面で反射、屈折することの観察結果や、凸レンズの焦点距離に関する実験結果から、物質の位置と像の位置および像の大きさの関係を理解している。	光について問題を見いだし、見通しをもって観察、実験などを行う。光の性質の規則性や関係性を見いだし表現すること。科学的に探究している。	主体的に学習に取り組む態度 光に関する事象や現象に導きだす疑問、科学的に探究しようとしている。

内容や時間のまとまりにおいて目指す生徒の姿



研究内容(2) 指導計画, 評価計画

・指導計画の工夫

単元を通して課題設定までに必要なプロセスを学ぶことに重点を置き、そのプロセスを繰り返して学習していくことで、生徒自身が自らの興味・関心に基づいた探究課題を設定できるようにすることを旨とした。



前時までに粒子の存在について学習した。状態変化(質量や体積の変化)について、粒子のモデルと関連付けながら考えさせた。

・評価計画の工夫

小単元の探究の過程ごとに「課題設定ワークシート①～④」を用いて、その記述から生徒のつまずきを見取り(形成的な評価)、指導改善につなげた。



児童生徒の資質・能力の育成に向けた指導と評価の一体化を図るため、児童生徒の目線で考えた指導計画と、形成的な評価を基に指導改善を繰り返す評価計画を作成した。

研究内容2【指導計画・評価計画】

児童が学習の明確な見通しをもち、重点とする資質・能力を育成するために、段階的な振り返りの場面を意図し、学習内容や活動によって単元を大きく3つに分けた指導計画を作成した。

【指導計画と評価計画の連携(「思考・判断・表現」に関わって)】

1, 2 (見通す)	「たすねびと」の全体像を理解する段階	言語活動	思・判・表 物語についての場面や流れを把握できているか (概要シートの記述, 見出しを付ける活動)
3, 4, 5 (捉える) (深める)	主人公「綾」の心情の変化やそのきっかけ(影響を与えたもの)についての叙述を読み深める段階		思・判・表 表現の効果に着目しながら、「綾」の気持ちの変化に関する叙述を読み取り、自分の考えをまとめることができているか (3, 4, 5時間目のワークシートでの記述)
6, 7, 8 (まとめる) (広げる)	これまでの学習を基にプレゼンテーションを仕上げ、友達と交流する段階		思・判・表 綾に最も影響を与えたことについて、叙述を基に自分の考えをまとめることができているか (スライドでの記述)

児童が単元の見通しをもち、前時までの学習を生かして本時の学習に取り組んだり、振り返りの場面で学習状況を把握できたりすることをねらい、単元の導入段階から児童と評価規準を共有し、段階的に振り返りながら児童の学習改善や教師の指導改善を図る評価計画を作成した。

研究内容2【指導計画・評価計画】

《単元構成の工夫》

本単元では、2つの場面での思考力、判断力、表現力等の重点的な育成のために、単元を前後2つに分けて指導計画を立てた。前半部分は、「検証計画の立案」場面に力を入れるために、異なる学習課題に関する実験計画の立案を3回繰り返して行った。また、教師主導の学習から、生徒主導の学習へとスモールステップで発展していくことにより、自ら課題を解決しようと意欲的に学習に取り組むことを目指した。後半部分は、「考察・推論」場面に力を入れるために、はじめに章課題を設定して、前半部分で身に付けた力を基にして実験を行っていき、その実験の結果から、課題の解決を目指した。後半でも、同じ学習過程を2回繰り返すことで、資質・能力の育成を図った。

		時数	
1	課題①	検証計画の立案	
2	課題②		
3			
4	課題③		
5			
6			
7	課題④	考察推論	
8	課題⑤		
9			

《形成的な評価》

前半部分では3回、後半部分では2回、同じ学習過程を繰り返した。各学習過程で形成的な評価を行うことで、生徒の学習調整や、教師の指導改善を図った。

### (3) 個別最適な学び、協働的な学び

個別最適な学び  
と  
個に応じた指導

「生きる力」をより具現化し、学習指導要領において示された資質・能力の育成について教育課程全体を通して着実に進めるためには、新たに学校における基盤的なツールとなる ICT も最大限活用しながら、多様な児童生徒を誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と、児童生徒の多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実が図られることが求められる。

学習指導要領に基づいた児童生徒の資質・能力の育成に向けて、ICT 環境を最大限活用し、これまで以上に「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげるとともに、カリキュラム・マネジメントの取組を一層進めることが重要である。

個別最適な学びとは、資質・能力の育成のための学習方法の一つであり、次のような特質をもつ。

**【「個別最適な学び」の要件や特質】**

- ① 教師は、学習者の特性や進度、到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等を柔軟に提供し設定する。
- ② 児童生徒は、自らの学習を把握し、学習の進め方を工夫し、調整しながら粘り強く取り組む。
- ③ 児童生徒は、興味・関心に応じ、課題の設定、自身による情報の収集、整理、分析、まとめ、表現など、主体的に学習を最適にする。

個別最適な学びは「個に応じた指導」を学習者の視点から整理した概念である。個に応じた指導とは、次の「指導の個別化」及び「学習の個性化」として教師の視点から整理された概念である。

**【個に応じた指導における「指導の個別化」及び「学習の個性化」】**

■指導の個別化

教師が、児童生徒一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行う。

■学習の個性化

教師が、児童生徒一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することによって、児童生徒自身の学習が最適となるよう調整する。

学習指導要領の総則では「児童（生徒）の発達の支援」の項目において、個に応じた指導の充実を図ることについて示している。指導に当たっては、「指導の個別化」と「学習の個性化」という二つの側面を踏まえるとともに、ICT の活用も含め、児童生徒が主体的に学習を進められるよう、それぞれの児童生徒が自分にふさわしい学習方法を模索するような態度を育てることが大切である。

なお、「指導の個別化」、「学習の個性化」は、あくまでも学習方法が異なるだけであり、単元の目標や学習評価については、これまでと異なるものではない。

個別最適な学びとは、個に応じた指導を学習者の視点から整理した概念であり、個に応じた指導とは、「指導の個別化」及び「学習の個性化」として教師の視点から整理した概念である。

協働的な学び

協働的な学びとは、児童生徒に必要な資質・能力を育成するため、探究的な学習や体験活動などを通じ、児童生徒同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重する活動全般を指す。

具体的には、ICT の活用により児童生徒一人一人が自分のペースを大事にしながらか共同で作成・編集等を行う活動や、多様な意見を共有しつつ合意形成を図る活動が考えられる。ICT を利用して空間的・時間的制約を緩和することによって、

遠隔地の専門家とつないだ授業や他の学校・地域や海外との交流など、今までできなかった学習活動も可能となる。

児童生徒は「個別最適な学び」の中で、分かったことや困ったことが生じ、そのような状態になるとそれを他者に伝えたい。その場が「協働的な学び」であり、異なる考え方が組み合わせられ、よりよい学びが生み出されることになる。

さらに、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないように、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が求められる。例えば授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなどが考えられる。

「個別最適な学び」や「協働的な学び」の目的は、あくまでも児童生徒の資質・能力の育成であることを、忘れてはならない。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ることで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善へとつなげていく。

**個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実とは、「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、さらにその成果を「個別最適な学び」に還元するなどして授業改善を図り、児童生徒の資質・能力の育成を目指すことである。**

指導と評価の  
一体化の考え方  
に立った学習評価  
の改善

評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという指導と評価の一体化を図る上で、児童生徒一人一人のつまずきや伸びについて指導過程で評価する形成的な評価を行うことが重要である。

児童生徒の興味・関心等に応じて学習が発展するよう指導・支援するに当たっては、その多様な成果を評価することが重要である。「個別最適な学び」における「指導の個別化」、「学習の個性化」は、あくまでの学習方法が異なるだけであり、単元の目標や学習評価については、これまでと異なるものではなく、形成的な評価及び総括的な評価は行うものである。

主体的に学習に  
取り組む態度に  
ついての評価と  
の関連

主体的に学習に取り組む態度についての評価については、児童生徒が「個別最適な学び」を進めていく上で、非常に重要な役割をもつ。特に小学校中学年以降、学習の目標や教材について理解し、計画を立て、見通しをもって学習し、その過程や達成状況の評価して次につなげるなど、学習の進め方を自ら調整していくことができるようにしていくことで、「個別最適な学び」がより一層、充実した学習活動となる。

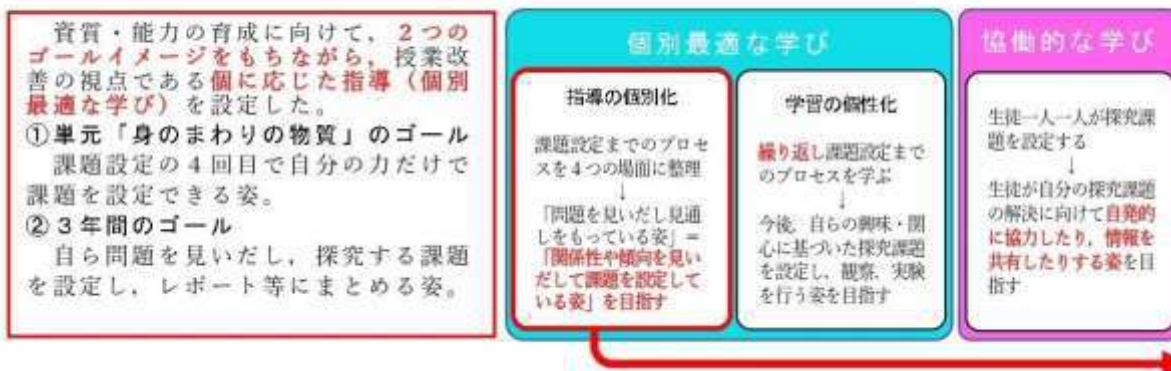
指導と評価の一体化の観点から、主体的に学習に取り組む態度についての評価を踏まえ、学習の進め方（学習計画、学習方法、自己評価等）を自ら調整するなど、児童生徒が自ら学習の進め方を改善していくことができるよう指導・支援していくことが重要である。

教師は、児童生徒の特性や進度、到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等を柔軟に提供し設定することにより、個に応じた指導が実現される。そのことにより、児童生徒が自らの学習を把握し、学習の進め方を工夫し、調整しながら粘り強く取り組んだり、興味・関心に応じ、課題の設定、児童生徒自身による情報の収集、整理、分析、まとめ、表現など、主体的に学習を最適にしたりする姿、つまり個別最適な学びへとつながっていく。教師が個別最適な学び、協働的な学びという視点をもった授業改善を行い、その結果、児童生徒の学習改善の実現が図られるのである。

**指導と評価の一体化の考え方に立った学習評価の改善とは、主体的に学習に取り組む態度についての評価との関連を基に、児童生徒一人一人に目を向けた形成的な評価を行い、授業改善を図っていくことである。**

第1学年理科「身のまわりの物質」 研究員授業 中央中学校  
生徒の興味・関心に基づいた課題設定を目指した授業

研究内容(3) 個別最適な学び、協働的な学び



研究協力校授業 高台小学校 研究内容3【個別最適な学び、協働的な学び】

指導の個別化の側面について、主人公の気持ちの変化を捉えさせるために、気持ちが直接書かれている叙述、せりふや行動、視点、情景に着目させたり、ワークシートやJamboardを活用してこれまでの学びを振り返らせたりして、予想される児童のつまずきに対する手立てを講じた。

児童の実態を考慮し、読み取りに関する叙述について必要に応じて児童が各自で確認できる共有フォルダを準備した。

学習の個性化の側面について、主人公が1番影響を受けたものを選定させ、ICTを活用してプレゼンに向けた資料を作成させた。言語活動を中心に児童一人一人に応じた学習活動や課題の提供を行うなど、その実現を図った。

研究協力校授業 広陵中学校 研究内容3【個別最適な学び、協働的な学び】

《学習の個性化》

単元のはじめに、「+1プロジェクト」と題し、生徒自身で設定した疑問点の解決を目指す活動を取り入れた。教師が提示する学習課題を解決していく中で、「自分の疑問を解決できないか」「新たな疑問はないか」を、それぞれの学習課題の終末に考えるようにした。また、単元の終わりには、自分の抱いた疑問に立ち返り、解決する時間を設けた。

**+1プロジェクト**

自分の疑問 自分の「身」の性質や、「身」の関わっている身のまわりの現象について、疑問に思うことを書こう。(疑問は学習の途中に書き足してもOK)

疑問に答えていくこと

自分の疑問 自分のもっている疑問についての答えや、新たな疑問を書いてみよう。

疑問に答えていくこと(前) 今の疑問

疑問に答えていくこと(後) 今の疑問

生徒自身の気づきや興味関心から学びを始めることで、学習意欲の向上を図った。このような取組を継続していくことで、生徒が学習の有用性を感じ、主体的に学習に取り組む姿勢に繋がっていくと考えた。

・学びをメタ認知するための振り返り

振り返りの具体

「◎：一番よくできたと思うところ」  
「△：一番うまくできなかったところ」  
の観点で生徒自身がワークシートに◎と△の印を付ける。

「課題設定ワークシート①～④」に取り組んだ後、場面①～④について生徒に自身の学びを振り返らせた。

課題設定までのプロセスを4つの場面に整理

比較する事象を提示

- ↓場面①「事象を視覚化・言語化する」
- ↓場面②「情報を抽出する(違いを見つける)」
- ↓場面③「関係性や傾向を見いだす」
- ↓場面④「課題を設定する」



言語活動として位置付けたプレゼン資料の作成は、児童と教師が協働しながら改善できるようにスライドにした。また、教師がプレゼン資料のモデルを複数作成し、自分に合った内容を確認させながら確実に資質・能力が育成されることをねらった。※写真は児童が作成したスライド

国語 たずねね

「誰」に最も影響を与えたか、人物をどれか!

「誰」が最も影響を与えたか、人物をどれか!

どうしてそう思った?1

どうしてそう思った?2

アゲちゃんを気にならないうけ

誰にも影響を与えたか

もう一人の植木アキ

自分の考えを深めたり、自発的に単元のゴールに向けて挑戦したりすることができるように、ICTを活用し、児童が必要なタイミングで叙述に関する考えの交流や他の児童のよい表現を参考にする場面を設定した。

《指導の個別化》

- ・課題を設定する場面で、「Google クラウド」に考え得る課題をあらかじめアップロードしておき、考えつかない生徒がそれらを参考にしたり、選んだりできるようにした。
- ・「Google スプレッドシート」や「Google Jamboard」を活用して、リアルタイムに他の生徒と意見を共有したり、参考にしたりできるようにした。
- ・「Java 実験室」を活用して、実験のシミュレーションを何度もできるようにして、実験計画が不十分で、理想的な結果が得られなかった生徒の補助となるようにした。



《協働的な学び》

班活動をする際に、指導の個別化を確実にはかり、生徒一人一人が自分の考えをしっかりともつから、話し合い活動を行うことで、「全員が学びを深め、深まりを実感し、『またやりたい』と思える協働的な学び」の実現を目指した。



計画立案の際には「チェックリスト」を用いた。生徒が自らの計画を振り返り、改善していくことで、自己調整を促した。

